

ディアスポラ⁽¹⁾ 接触とは何か

— 新宿区大久保地区の多文化化の歴史から —

川 村 千鶴子

Diaspora Contact: From the aspect of the historical transformation of multicultural awareness in Okubo, Shinjuku

Chizuko KAWAMURA

「都市には歴史がある。それはそこで暮らす人々の思いの中で由緒になり、
何らかのものとして語り継がれる。それがコミュニティの基盤を成すのだ。」
(歴史学者アーノルド・トインビー アテネの集会にて、1977)⁽²⁾

はじめに

都市インナーエリア・新宿区大久保地区は多文化化・多民族化が先鋭的に進んだ街として全国に知られている。そこではさまざまなエスニック的背景をもった人びとが出会い、文化的多様性に拓かれたアイデンティティを生みだしてきた。アパデュライが「エスノスケープ」と表現した移民、難民、亡命者、外国人労働者、留学生、その家族といった人々が織り成すスケープ(Appadurai, 1996=2004: pp.70-71)を日常の中に受け入れている街が大久保地区である。

人びとはそこで何を語り継いでいるのだろうか。大久保地区のコミュニティの基盤を成す「由緒」とは何か。本稿は、既往研究には用いられなかった新しい概念「ディアスポラ接触(diaspora contact)」を切り口として、大久保地区論を展開する。ディアスポラとは何か。ディアスポラ接触は、異文化接触とはどのように違うのか。ディアスポラの蓄積と語り継ぎの歴史は、人々の思いの中でどのような「由緒」を生成しているのか。ディアスポラ概念を通して、大久保地区コミュニティの多文化化の特質を浮き彫りにする。

1. 新宿区大久保地区のホスト社会の構成員とは

本稿が大久保地区をディアスポラの接触領域として取り上げるのには理由がある。新宿区が、23区で港区を抜き、都内で最も外国人が多住する地域となったのは、1991年であった。その後外国籍住民は増勢を示し、日本人住民の減少もあって、2007年7月1日現在、総人口約27万8千人に対し、約3万1千人の外国人が集住し、その割合は11%となる。その新宿区の中で際

立って先鋭的な多国籍・多民族集住地区へと変容したのが大久保地区（大久保1丁目、2丁目と百人町1丁目・2丁目）である。

大久保地区では、80年代から新規来日外国人の急増によって外国人比率が上昇し、2007年7月1日、登録上、外国籍住民が日本国籍住民の約半数となった。外国人比率は34.6%となり、この地域に限定すれば3人に1人は外国人である。

もとより大久保地区は、明治・大正期から郊外住宅地として発展し、「移民」による「新開地」として捉えられていた。2000年からは当該公立小学校では約6割の児童が外国系であり、昼間人口に占める外国系人口も圧倒的に多いことも周知されている。日本の外国人政策が、日本人をマジョリティ、外国人をマイノリティとして括り、国籍をもって外国人と日本人を二分する概念に大久保地区は疑問を投げかけている。なぜならマジョリティにもマイノリティにも、多様なエスニシティが織り込まれているからである。

2. 研究領域としての大久保地区

大久保地区は1980年代には外国人居住と多文化化は顕著な社会現象として衆目され、研究者の標的となっていた。教育学、言語学、人類学、法学、歴史学、社会学、政治経済学、都市工学、地理学、看護学、精神医学など、さまざまなディシプリンの研究者が集まり、方法論上での対話や相互補完が生かされ、多文化主義をめぐる多文化社会論を体系づける方法論の構築が行われてきた。研究と実践を両輪とする研究者には、深夜に及ぶフィールドワークのために大久保地区に居住する場合もある。大久保地区をフィールドとした主な研究成果（稲葉2006、塩路1994、松井1994、小管1994、奥田1995、江淵2000、加納2003、鈴木2002、田嶋2005、渡戸1993, 2001、堀内2000, 2007、川村1982, 2006）は、次々に報告され、現在も多数の研究者によって継続的な調査が進行している。

既往研究は、外国人の生活拠点の形成、居住と混住の実態、学校内部の諸相、エスニック・ビジネスの起業、自治体施策やNGO活動、葛藤・軋轢、共生コスト、送出国と呼応するまちづくりなど住民の意識変容や地域の社会現象に照射してきた。

稲葉は、ニューカマーの居住実態と大久保地区の都市空間の変容と生成を研究し、江戸時代から移住者を一貫して受容してきたことが、1980年代以降のニューカマー受け入れの精神的土壌となったと指摘している（稲葉、2006：pp.9-30）。渡戸は1992年～94年の連続調査を『新宿調査2000－変貌する大都市インナーエリア－第2次外国人急増期の大久保・百人町を中心として』（2001：渡戸研究室）にまとめている。

筆者⁽³⁾は、大久保地区が多文化の磁場となり「移民」「亡命者」「宣教師」「留学生」などを親密圏に受容した史実が地域住民間で語り継がれている事実と在日コリアンの諸相が、地域の多文化意識の醸成に影響を与えてきたことに着目してきた。

1853年黒船到来後、中国人の受入れに始まる新宿の歴史的変遷を考察し、筆者はその推移を

4段階に分けて分析した。第4段階目にあたるリーセントニューカマーズは、先人たちの豊富な情報とネットワークをもって移住している（川村、2001：p.106.）。

＜表1＞新宿大久保地区の外国人移住者の推移4段階

第1段階 Very Old Comers	明治初頭、中国から移住した留学生を中心に考察、亡命した人々
第2段階 Old Comers	戦中、戦後を通して、日本に定住した在日韓国朝鮮の人々を中心
第3段階 New Comers	1980年代以降、エスニックタウンを形成したアジア系新規来日外国人 が中心
第4段階 Recent New Comers	90年入管法改定後に来日した約100ヶ国の多国籍な外国人が中心、 90年代後半～2000代に移住した人々

（川村、2001：p.106）

さらに90年代から始まったホスト社会の不安・混乱、葛藤・軋轢の深層を捉えながら、その社会的変容を多文化主義（multiculturalism）への導入期〈開かれた回路〉、第一成長期、彷徨期、第二成長期、成熟期、そして安定期として捉え⁽⁴⁾、大久保地区の特性とトランスナショナルな諸相を明らかにした（川村、1998：pp.35-39、川村、2001：pp.75-128）。大久保地区での歴史的変遷は、多文化主義の理念の複雑さを浮き彫りにしてきた。多文化主義とは、「国民国家の私的・公的領域における文化的・エスニック的多様性を承認し、そのような差異に由来する不平等の是正を目指す」（関根、2000：pp.42-43）ことであり、大久保地区のまちづくりの過程は、結果的には多文化主義の限界や矛盾との闘いを実践したものであったことを指摘した。

3. 統計数値からみる大久保地区の現在

表2に示すように新宿区区民の内訳は、11%の外国人比率となっている。

(1) 新宿区全体の外国人比率

＜表2＞19年度7月1日新宿区人口内訳と外国人比率

全 体 数			
	人 口	男	女
実 数	278,18	139,009	139,172
外国人登録者数			
	人 口	男	女
実 数	31,336	14,785	16,551
割 合	0.11	0.11	0.12

※人口総数とは住民基本台帳人口＋外国人登録人口

※新宿区統計資料をもとに川村作成

国籍別では、韓国・朝鮮が最多で44.1%で、中国で31.1%、ミャンマー・フィリピン・タイ・マレーシア・インドネシアといった東南アジア系が目立っている。フランス・米国・英国などの欧米系は、約7%である。日本全体との比較では、南米系が少ない。在留資格別では、留学、就学、家族滞在、日本人の配偶者等、短期滞在、永住者、在留資格なし、特別永住者と続く。登録窓口には「在留資格なし」を登録しており、2000年のころは約2000人の「在留資格なし」がいたが、現在その数は減少している。

特別永住者とは、1991年11月1日に施行された「日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法」（略称・入管特例法）により定められた在留の資格のこと、または当該資格を有する者をいう。米国戦艦ミズーリ艦上での日本の降伏文書調印日（1945年9月2日）以前から引き続き日本に居住している平和条約国籍離脱者（韓国・朝鮮人及び台湾人）とその子孫を対象としている⁽⁵⁾。

(2) 新宿区大久保の外国人居住の概要

<表3>新宿区大久保地区男女別外国人登録者

町 名	世帯数	男	女	計
百人町1丁目	1,183	663	647	1,310
百人町2丁目	1,243	684	765	1,449
大久保1丁目	1,928	909	1,262	2,171
大久保2丁目	2,105	1,091	1,399	2,490
総 数	6,459	3,347	4,073	7,420

<表4>新宿区大久保地区男女別人口世帯数

町 名	世帯数	男	女	計
百人町1丁目	2,033	1,739	1,122	2,861
百人町2丁目	2,042	1,732	1,356	3,088
大久保1丁目	1,758	1,452	1,123	2,575
大久保2丁目	3,435	2,906	2,586	5,492
総 数	9,268	7,829	6,187	14,016

<表5>新宿区大久保地区における男女別外国人登録者数割合

町 名	世帯数	男	女	計
外国人登録者数	6,459	3,347	4,073	7,420
全 人 口 数	15,727	11,176	10,260	21,436
割 合	0.41	0.29	0.39	0.34

※平成19年7月1日現在 新宿区統計資料をもとに川村作成

表5に示すように大久保地区における世帯数では、その4割が外国籍世帯を占める。外国人の人数では、男性が29%、女性39%となり平均34%の外国人比率である。1990年には13.4%だった大久保地域の外国人比率は、1995には16.3%、1999年には22.6%で5人に1人となり、翌年2000年には4人に1人(25.4%)と急増し、2007年7月、ついに34.6%となり3人に1人となった。

日本国籍をもつ外国系の子どもや帰化者の数が把握できれば、日本人内部のエスニシティの多様性がより正確に浮き彫りになるだろう。

4. 大久保地区に外国人が集住する理由（先行研究のまとめ）

大久保地区には歴史的に外国人を呼び寄せたいとする発想はなかった。例えば群馬県大泉町は労働力として日系ブラジル人を呼び寄せて多文化化が進展している。なぜ大久保地区に外国人が集住し続けるのか。先行研究⁽⁶⁾をまとめると以下の10項目に整理できる。

- 1) 歴史的に大久保地区は、新天地を拓いた指導力ある移住者が居住し、同国人を引き寄せる吸引力があった。
- 2) 歌舞伎町に隣接し外国人に職を提供してきた。割のいい外貨獲得、400を超えるエスニック・ビジネスの起業と進展はめざましい。
- 3) 居住の差別が少ない⁽⁷⁾。91年、新宿区は居住の差別をなくすために基本条例を全国に先がけて設定した。外国人顧客を専門とする不動産業者が早くから出現した。
- 4) 日本語学校が多く、留学生・就学生が住みやすい。ピーク時には150校もの日本語学校が林立し、専門学校、大学も多い。学位の取得、技術の習得の街である。
- 5) 街は安全で生活に便利で、利便性に富む。
- 6) 大小さまざまな教会や宗教施設（寺院、廟、モスク）が約20箇所ある⁽⁸⁾。心の拠り所であり情報交換の場ともなっている。
- 7) 大久保地区はNGOが結集する街であり、特に外国人支援NGOが多数ある⁽⁹⁾。
- 8) 自治体は、多言語でのパンフレット作成や相談窓口、日本語教育など外国人サービスに力を注いだ⁽¹⁰⁾。2005年「しんじゅく多文化共生プラザ」を創設している。
- 9) 民間でも多言語の情報誌が発達している。
- 10) 子どもを育てやすい環境にある。医療機関、保育所、小学校などが整っている。

これらの10項目が重層的にまちづくりに影響を与え、住民の多文化意識を形成してきた。その多文化意識の醸成の基盤となってきたのが、この第1の項目に関連する在日コリアンとの接触と共生である。調査の過程で多様な視座を見い出したが、在日コリアンは、ホスト社会の構成員として活躍し、ホスト社会の内部の「差異」を顕在化させハイブリディティ化を促し、やがて多文化意識を根付かせている点に着目した。

5. 本研究の目的と構成

本稿は「外国人比率」といった量的変化ではなく、ホスト社会内部の質的変容に照射した。本研究の目的は「ディアスポラ接触 (diaspora contact)」の歴史的連続性と大久保地区の共生の内実を明らかにすることにある。大久保地区での在日コリアンとの接触事例を用いて、「ディアスポラ接触」という概念を切り口に次の分析課題で研究を進めていく。

- 1) ディアスポラとは何か
- 2) 大久保地区におけるディアスポラの歴史 (contact history)
- 3) ディアスポラ接触とは
- 4) 路地裏のディアスポラ接触の語りとは
- 5) ディアスポラ接触の体験は地域に何をもたらしたか
- 6) ディアスポラ接触が語り継がれること
- 7) ディアスポラの力
- 8) ディアスポラ博物館の力
- 9) 結語として接触領域 (contact zones) としての大久保地区の特性とディアスポラの有効性を導きだす。以下は、このようなプロセスを追いながら、大久保地区で語り継がれているディアスポラの事例を多面的に考察し研究したものである。

6. ディアスポラとは何か

ディアスポラとは、ギリシャ語の動詞スピロ（種をまく）と前置詞のディア（分散する）からできた言葉である。古代ギリシャ人はディアスポラを「移住」や「植民」という意味で使用してきた。しかしながら、ユダヤ、アフリカ、パレスチナ、アルメニアの人々にとっては、「ディアスポラ」という表現はそれ以上に残忍かつ冷酷な意味を含んでいた。

コーエンは、ディアスポラとは故郷を夢みながら異境生活を送るという集団的な精神的外傷、国外追放と捉え、近年には、海外に住みながらも強い集団アイデンティティを持ち続けてきた他の人々が、積極的に植民地化の仲介役をしてきたわけでもなければ、虐待の被害者でもないが、自らをディアスポラと呼ぶようになってきたと指摘している。(コーエン、2001：p.11)

このようにディアスポラとは、元来、ある民族集団がもとの土地から離散することを指し、歴史的には主にユダヤ民族の離散経験について語られてきた。しかし、今日では、多くの国民国家においてエスニック・文化的多様性が顕在化しているなかで、特定の民族集団に限られない人の移動とそれに伴う社会現象、その概念を含めて、広義に「ディアスポラ」と呼ぶ機会が増えている。本稿では、ディアスポラを祖国から離散し、いつかは故国に帰りたいという願望があり、故国の喪失を認めまいとする抵抗と、ホスト社会からの心理的孤立がある越境者を包含するコミュニティを指すと定義する。

サフランによれば、ディアスポラの特徴を次の6つに集約している。

- 1) 特定の起源的中心を離れ、周辺たる外国の領域への移住であること
 - 2) 故国に関する集団的な記憶
 - 3) ホスト社会に受容される望みがなく、ゆえに疎外され孤立していること
 - 4) いつかは帰るべき処として祖先の地を真正かつ理想的な故国とみなしていること
 - 5) 故国に対する政治・経済的な関与
 - 6) 故国との継続的な関係
- (サフラン、1991：pp.83-84)

大久保地区でのディアスポラ接触のひとつとして、戦前・戦後を通じてここに移住してきたオールド・カマーズに関する人々の記憶と思いの中から探り出すことができる。

韓国は、歴史的に多くの移民を送出してきた。1910年代の初期労働移民、日本帝国主義による植民地支配、済州島四・三事件⁽¹¹⁾、朝鮮戦争⁽¹²⁾時の避難民、1950年代から60年代にかけてのヨーロッパへの労働移民、海外養子制度、そして自由意志で国外へと出て行った韓国人もいる。金によればこれらの人々とその子孫をあわせると現在約700万人を超える「韓国人」が世界の各地に散らばっている(金、2007：p.211)。

これらの人々を「コリアン・ディアスポラ」とする言説が増えている。たとえば、ソニア・リヤン(2005)はその著書『コリアン・ディアスポラ―在日朝鮮人とアイデンティティ』の中で、1923年の関東大震災とその直後の朝鮮人大虐殺を近代日本の国民主体出現の原理と合わせて考察している。さらに日本という異郷に置き去りにされた在日コリアンの生きざまを民族誌的にまとめ、在日コリアンにとって故郷がどのように喪失させられ、再建不可能な状況になるかを考察し、コリアン・ディアスポラのそれぞれの特殊性を確認している。

このように日本の植民地化とその後の強制連行の歴史、関東大震災の朝鮮人虐殺などに代表される在日コリアンの苦難を想起するとき、彼ら・彼女らを単に「移民」とか「移住者」とは呼べない。では戦前・戦後を通じて大久保地区にきた在日コリアンのすべてを「コリアン・ディアスポラ」と呼べるかどうか。自発的な移住者や留学生・就学生をディアスポラと呼ぶには異論もあるが、実際には後述するようなディアスポラ的な状況に入っていく留学生も多い。

筆者は、大久保地区に住んでいる在日コリアンの故郷の喪失とアイデンティティの揺らぎを受け止め、この複雑な心境や衝撃的な接触をディアスポラ接触と捉える。さらに大久保地区の東西に多数流れている細い「路地裏」という都市空間の骨格が、歴史的に在日コリアン、軍人、社会主義者、キリスト教宣教師、文士、亡命者、留学生など故郷を遠くはなれたディアスポラとの接触領域として生きているという点も考察した。

7. 大久保地区におけるディアスポラの歴史 (contact history)

大久保地区での中国、ミャンマー、フィリピン、タイ、マレーシアなどからの移住者にもディアスポラの要素を持つ人が多いが、本稿では現代の大久保地区に至る伏線を、戦後の復興に力を

尽くしてきた在日コリアンの存在とその力強い回路の創出に焦点をあてる。戦後、日雇い労働者や在日朝鮮人などが空き地や山手線・中央・総武線のガード下に住みつくようになり、大久保地区ではバラック街が形成された。1950年代には済州島四・三事件や朝鮮戦争の影響で朝鮮半島から逃れてきた朝鮮人が流入し、大久保地区に居住している。また大久保地区には済州島を故郷とするコリアンと本土を故郷とするコリアンがいることにも留意すべきである。

事例1：ロッテ財閥の創業者^{シンギョコウ}辛格浩（重光武雄）

日本の植民地時代、1922年10月4日、辛格浩は、朝鮮慶尚南道山市（現蔚山広域市）の寒村に生まれ、伯父が設立した書堂（ソダン）で学び、小学校に進学する。向学心のあった辛は日本内地に留学を決意し、釜山から連絡船に乗り下関へ渡る。創始改名のため重光武雄を名乗り、早稲田実業普通科定時制に入学した。1946年早稲田実業学校卒業し、苦学と差別を体験しながら作家の道を断念し早実工業学校へ転部している。

在日二世である河の研究に依拠すると、重光は牛乳や新聞配達、雑役や運搬などの肉体労働によって生活費と学費を稼がねばならなかった。苦学と植民地民族の差別を体験した彼は帰化を拒否し、韓国籍堅持によって表徴され続けた。「日本のマスコミなどで、韓国人はみじめだなどと同情的に言われるのは迷惑だ。むしろ韓国人でよかったと思う」と朝日新聞の取材に対して主張している（河、2003、pp.88-89）。

重光は「日本に住む以上、日本社会に融け込んで日本のために尽くす。それがいずれは韓国のためになる」という起業家精神を公表した。1944年、重光はある日本人から見込まれて6万円の出資金を受けて事業を始めるが米軍の空襲ですべてを焼失した。出資者は出資金を諦めていたが、重光はそれを必ず返すと約束している。朝鮮人である自分を見込んでくれたのに申し訳ない、と恩義を感じたからである（前川、1987）。河はこのことは信憑性が高いと次のような分析をしている。

「被差別マイノリティはその不幸な環境により、感情の起伏が激しい。傷つきやすく感激しやすい。その中で成功する人々の資質として見逃せないのが、自分を見込んでくれたマジョリティの期待を裏切らないというものである。重光はその資質を有していた」（河、2005、p.130）。

1945年、日本は敗戦と同時に朝鮮を解放し在日コリアンの多くは帰国したが、重光は日本に残留した。「無一文の手ぶらでは帰国できなかった」。化粧品製造販売から撤退し、占領軍・米兵から手に入れたガムを細かく切って再包装し、高田馬場駅前で販売を始めた。ガムは持続的に甘味を満たしてくれるが、日本人にとって異質な食べ物だった。1948年株式会社ロッテを設立し、新宿区大久保地区の土地を購入しガムの大量生産＝工場化に着手している。苦労の末、1959年重光はロッテをガムのトップメーカーに育てあげる。このようなライフヒストリーに地域の日本人住民には羨望があったと地元住人が当時を語っている。

ロッテ新宿工場が操業を開始すると、雇用を期待した本国の朝鮮人や在日朝鮮人などが多数集

まってきた。大久保地区には簡易宿所も増え、工場周辺に居住し、飲食業、旅館業、娯楽産業に就くなどの起業家となり、ビジネスを成功させている。地域社会へ貢献していることから、日本人住民にも尊敬されている（川村、1998：pp.35-39）。

筆者は、ロッテ工場のすぐ近くに生まれ育った。周辺の近所の主婦たちは、乳母車のような荷物入れにガムやキャラメルを包む内職セットの段ボール箱をそれぞれ自宅に運んでひとつひとつ包装する内職をしていた。街一帯にガムの香りが漂い、筆者は自転車で工場の周辺を走るのが楽しみであった。現在でも地域の高齢者はロッテの社長が自らリヤカーを引いて路地裏を石鹸やガムを運ぶ姿を語り継いでいる⁽¹³⁾。当時は日本人にとって「ガムをかむ」という習慣はなく、ガムをかむのは行儀が悪いと捉えられることから、米国の企業は、日本を標的としなかったとも伝えられる。

その後、重光は「お口の恋人ロッテ」に代表されるマーケティングに力を注ぎ、1966年には韓国ロッテを設立し、1973年千葉ロッテマリーンズ（当時はロッテオリオンズ）オーナーに就任している。ロッテ財閥を形成、ロッテホテル、ロッテ百貨店、ロッテリアなどグループを率い韓国財界を代表する「愛国的企業家」となり、朝鮮儒教の錦衣還郷（クミファンヒャン）を基底とする起業家精神を実現した⁽¹⁴⁾。（河、2003：pp.127-140）

このように「一世」は勤勉に働いた。植民地支配という屈辱的過去をもち、日本で成功した暁には郷里に「凱旋」するのが彼らの夢であり、日本は成功するまでの一時的に滞在する仮の宿に過ぎなかった。不利な起業環境におかれていた彼らをして起業活動に駆り立てたのは伝統的朝鮮儒教の孝を基底とした錦衣還郷（クミファンヒャン）志向であった。（前掲書：pp.130）

韓人の行動特性は先祖の祭礼祭祀のための帰郷であることに当時の地域住人はどれほど理解をもっていたことだろう。伝統儒教教育によって伝承された朝鮮儒教の孝からすれば、先祖に対する祭礼祭祀の実践は韓民族たる者の当然の責務であった。解放直後、200万人を越えていた在日コリアンのその4分の3は帰国した。「一世」が留まった地は、36年間に渡り韓民族を支配した国、日本である。

河は郷里の人々からみると帰郷しなかった「一世」の行為は、朝鮮儒教の孝を軽んじる動かぬ証拠であり、背信行為に近かったと指摘する。「一世」は、在日を選択した結果として、好むと好まざるとにかかわらず日本経済の構成員となり、朝鮮戦争特需の経済的恩恵を受けてしまった。それゆえに一世は郷里の人々に対して道徳的負い目をもたざるを得なかった。現状では「一世」は郷里の人々から歓迎されず「帰国一世」として新たな差別を味わうことになる。それが一世のジレンマ（前掲書：p.87）であったことに気づきをもっていた住民がどれほどいるだろうか。

後述するが、筆者の調査では、その一世の感じた郷里の人々からの差別・ジレンマを二世・三世がもっと強く衝撃的に感じていくことになる。また、同じ大久保地区にありながらロッテの創業者は、本土出身なので、ホテル街を形成した済州島出身の韓国人とは大久保通りをはさんでつ

ながりがない。地域ではもっぱら「もともと石鹼を売って財をなし、早稲田を出て、そこから菓子屋になった才覚がある人で、努力家だ」と誇らしげに語り継がれている⁽¹⁵⁾。

在日一世には植民地時代に来日した人もいれば、韓国が独立したあとから韓国・朝鮮戦争の戦前・戦中・戦後に来日した人もいる。オールドカマーは、植民地時代からつながるわけで、コリアン・ディアスポラとしての彼らの行き先がたまたま日本であったということにもなる（李、2007：pp.140-184）。植民地時代、韓国・朝鮮戦争の時代を通して、韓国・朝鮮半島から北に行った人たちはロシアのコレスキとして、中国に定着した人たちは延辺自治区として、半島内で移動した人たちは狭義のシリャンミン（李、2007）として、玄海灘を渡って日本列島に来た人たちは在日朝鮮人として存在することになった。在日一世の場合、強制連行、密航など渡航手段はさまざまであり、日本人からは彼らの歴史的背景は似通っていても、ディアスポラ個人の渡航経路や時期・経験・成功の有無の差は大きい。

日本人は通常「在日韓国・朝鮮人」「在日コリアン」と一括りにして表現してしまいがちだが、彼らを個別にその生涯を考察してみると、一人ひとりの差異は大きい。それが地域住民によって語り継がれている。それを伝聞する人々自身も、彼らの生活空間である同じ路地裏を通過する時、ディアスポラとしての彼らの経験を身近に感じ、その思いを想像し共有することができるようになる。接触領域としての路地裏が活きているのである。

8. ディアスポラ接触とは何か

次にディアスポラ接触とは何か。異文化接触とディアスポラ接触はどこがどのように違うのだろうか。大久保地区には、韓国本土や済州島出身の方が移住していた。しかし、町会や商店街の付き合いや顧客としての交流がディアスポラ接触と言えない。それは、単に移住者とのあるいは異文化の他者との近所付き合いに過ぎない。ディアスポラ接触は、同化圧力や差別が起きたとき、例えば、卒業式、恋愛、結婚、就職、入居などの節目や病気、葬儀など一身上に関わることや、地震、火災といった命に関わる非日常的な事態に遭遇したとき、双方がその出自に気づき、その属性によって衝撃を共有し、戸惑い、傷つき、混乱し、閉鎖的心理状態に至るような状況、あるいは、それを起点として新しい生き方を模索するような時空の共有である。

事例2：韓宗硯（ハン・ジョンソク）と新宿区役所の職員

在日コリアンにとって指紋押捺義務も長い間の差別の一つであった。1952年、平和条約が発効され、在日コリアンは「帝国臣民」から一転し「外国人」と宣言された。「外国人登録法」により初めて「指紋」押捺義務が盛り込まれた。その後28年を隔てて1980年9月、在日一世の韓宗硯（ハン・ジョンソク、1928年生まれ、9歳で渡日）は、日本で初めて指紋押捺を拒否した人であった。在日一世の韓宗硯は新宿区役所での気持ちを語っている。

「私は子孫にこれといって残してやれない代わりに、指紋を採られなくても済むようにして

やれないかと思ったのです。でも怖かったです。指紋を押さなければ、登録証はくれないだろう。だとすると、登録証の提示を求められた際、「不携帯」で逮捕され、下手をすれば大村収容所送りになって、韓国に強制送還されるかもしれない、そう思うと。でも役所では指紋を押さなくても、ちゃんと登録証をくれたので、いささか拍子抜けした感じでした。」(田中、1991：pp.74-75)

筆者は、このエピソードに触れたとき、韓宗硯の勇気もさることながら、28年間も続いていた指紋押捺が拒否されたことに対して、指紋押捺がなくとも登録証を発行した新宿区役所の職員的心情を想像した。心のどこかで指紋押捺は差別だと思っていたのかもしれない。いずれにせよ、その職員が指紋押捺なしで登録証を発行したことが、新しい時代を生み出すきっかけとなったのだ。指紋押捺拒否は、その後、一人また一人といっしょに“燎原の火”のごとき様相を呈した⁽¹⁶⁾(田中、1991：pp.73-94)のである。

差別の記憶、被差別の闘いは、地域住民だけでなく、自治体職員の中にも語り継がれる。戸惑い・迷い・葛藤の中で差別を是正していこうとする多文化社会への道程である。筆者は、このような接触を単に異文化接触と呼ぶのではなく、ディアスポラ接触と呼称することによってその葛藤と勇気をより鮮明に後世に伝えることができると思う。

90年入管法改定の後におきた大久保地区の騒動のときにもさまざまなディアスポラ接触があった。旅館業を営んでいた在日コリアンは、ホスト社会の構成員として新規来日移住者に対峙したのである。そして90年改定入管法後、大久保地区に出現した非正規滞在者と在日コリアンを含む住民との接触もディアスポラ接触といえよう。

当時大久保地区の町内会では「オーバーステイ」が話題となった。日本全体が「不法滞在者を排除すべき」といった風潮のとき、大久保地区には「非合法の滞在者を追い出すのではなく、彼ら・彼女らを合法的に滞在できるように支援するほうがいい」という意見をもった住民がいたのである。大久保地区に拠点をおくNGOの発端を調査した時に、その中心的役割を担っている実践者の殆どが、最初にディアスポラ接触を体験し、そこから新しい状況を切り拓こうと努力し、その過程でNGOが生まれているという共通項を見出すことができた。例えば、道路のゴミ箱を開けたとき、フィリピン女性と遭遇し、その衝撃がきっかけとなって女性の支援グループが誕生した。出産間際のミャンマーの女性を支援したことがきっかけとなったNGOもある。

筆者も80年代に開発教育を展開する過程で、大久保地区ではさまざまなディアスポラ接触を体験した。歌舞伎町のペンキ塗りをしていたのは、バングラデシュの院生で、その後彼はオーバーステイになってしまった。イスラム教徒であった青年は精神的ストレスから病気になり借金も嵩んでいた。また居酒屋で毎晩皿洗いに明け暮れていたのは、スリランカ人であった。山手線を1周しても涙が止まらない博士課程の韓国の留学生やストレスから髪の毛が抜けて円形脱毛症になったタイの留学生など、数え切れない多くのディアスポラ接触が筆者の実践活動の契機となっ

た。彼ら・彼女らに共通することは、日本社会の侮蔑的な言葉や視線を日常的に受けていたことだ。筆者は、新宿のマンションを借りてそこを支援の拠点として食事やお風呂を提供した。苦学と差別の体験、家族の離散、望郷の念などその内実は、在留資格のイメージとは全く異なる状況であった。日本政府は単純労働者を受け入れないとしているが、彼らの労働は3K以外の何ものでもなかった。

奥田のヒヤリング調査からも、ディアスポラの声が含まれていた。「日本に暮らした4年間は、人生の大きな損失であった。」「日本では、何一ついいことがなかった。友達もできず、家に招かれたことなど一度もない」失望と孤独の日々であったことを語って帰国する人も少なくなかった（奥田、1993：p.305）。

筆者は満身創痍で命からがらに帰国していったバングラデシュ人を見送った改札口での別れを忘れられない。それから約15年が経過し、彼はいまダッカ大学の教授になっている。80年代からの華やかな「国際交流」と歌舞伎町・大久保地区の「共生の内実」とは雲泥の差があった。後者を筆者はディアスポラ接触と呼んでいる。

9. 路地裏のディアスポラ接触の語り

明治・大正時代には小泉八雲、孫文、蒋介石、宋慶齡らが住処としたことが語り継がれる。明治から大正にかけて、大久保地区で亡命生活を送ったのは中国革命の志士孫文（1866-1925）であり、彼を物心両面で支えたのは大久保地区に住んでいた梅屋庄吉（明治元年長崎生まれ、日活創設者）であった。ラフカディオ・ハーン（1850-1904、小説家）は、早稲田大学で教鞭をとり、二人の子どもを大久保小学校に通わせ、保護者として講演なども行っている。1904年に没し（享年54歳）、大久保は終焉の地として史跡とされ、記念公園には胸像があり、大久保地区のラジオ体操の場として使われている。「帰化」「子育て」「異郷に眠る」というディアスポラの体験はここでは地域の由緒となっている⁽¹⁷⁾。

百人町と大久保の住民はその地名と由緒を重視し、70年代に「中央新宿」との住所表示の変更を促された際にも地名を変更しない途を選択した。商業発展よりも由緒ある地名の街を保持する途を選択したのである。こういった住民気質によって、大型再開発プロジェクトの誘いにはおいそれと乗らない地元愛着型意識が継承されることになる⁽¹⁸⁾。

そのことが、南北に流れる無数の細い「路地」が、江戸時代から今日まで変化しない理由でもあり、この都市空間の骨格という特徴はディアスポラの歴史と無縁ではない。ディアスポラの人々の記憶を路地裏のさりげない会話の中で発見し、またそれを語り継いでいることが、コミュニティの由緒として大久保地区の土壌となっている。

10. ディアスポラ接触の体験は地域に何をもたらすか

ディアスポラという概念は、郷土から遠く離れた土地への意志的・強制的移動と離散を示すユダヤ的文脈であったが、済州島から来日し大久保地区にホテル街を形成したコリアン・ディアスポラの文脈に重ね合わせることが可能である。奥田らの調査によれば、大久保百人町のホテル街は戦後間もなく米軍のための慰安婦を集めたところだった。もともと市ヶ谷に大本営があり、百人町や大久保には中将くらいの将校たちが住んでいて、馬で30分の道のりだったという。敗戦の時には済州島の人たちが多数移住し、ホテル街を形成した。(奥田・田嶋他編、1993、p.198)。筆者の調査によれば、地域住民が済州島出身者の苦勞に思いをきたすまでには長い歳月を必要としたことは明らかである。

事例3：李良枝（イ・ヤンジ、1954～1992、芥川賞作家 本名は田中淑枝）

多くの大久保地区住民が、コリアン・ディアスポラの優れた才能に気づきをもったのは、在日二世による文学からだった。若くして他界した芥川賞作家李良枝（イ・ヤンジ、이양지）とその一家は、大久保地区に暮らした近所付き合いの仲間であり、地域の誇りとなった。李良枝は、山梨県南都留郡に生まれ、日本で教育を受け家族とともにしながらも韓国人としてのルーツを再認識しようと必死に試み、韓国留学に踏み切った。想像を絶する葛藤に生きた感性を文学に投入した。小学生のときに両親が帰化し日本国籍を取得したので、同時に彼女も国籍は日本となった⁽¹⁹⁾。1988年にはソウル大学を卒業し、『由熙』（ユヒ、유희）で翌89年の第100回芥川賞を受賞した。韓国女性の視点から、在日韓国人の若い女性が、自らのルーツを尋ねて韓国に留学したが、故郷はそこにもなかった。アイデンティティの喪失にもがき苦しむディアスポラ体験を投影させた作品である。梨花女子大学舞踊科大学院修士課程に学びつつ、1992年には長編「石の聲」の執筆を手がける一方で妹の発行する四ヶ国語情報誌『We're』の創刊を手伝っていたが、急性肺炎を罹患し、まもなく死去した。

移民第二世代のジレンマとホスト社会のまなざしを山本は、「マジョリティは説明を求められない。ただ他者であるマイノリティの側に自らを語らせ、分類し、ラベルを貼っていくのだ」と指摘する。(山本、2007、pp.246-247)

1992年、37歳の急逝の葬儀に、地元の人々は長い列をつくって早すぎる死を悼んだことを筆者は忘れられない。日本社会の差別を反省し、想像を絶する苦悩を地域が少しでも共有しようとしているのを感じた。大久保駅前の喫茶店でお父さん（1925年生まれ、新宿大久保地区でアパート経営、千葉県御宿町で民宿を営む）は、筆者に心境を語ってくれた。

「日本の植民地だった済州島から、君が代丸にのって15歳で日本にきました。2年間尋常高等学校に通いました。映画が好きで、日本文化や言葉は映画から覚えたのですよ。昭和17年に大東亜戦争が始まって、軍属としてマグロ船に乗り、南方にいました。戦後、トラック島で戦死した父の遺骨とともに、一時済州島に戻ったのですが、再来日しました。日本人の義理や

人情に惹かれていました。山梨県富士吉田市に6畳のアパートを借りて織物の仕事を始めました。全国を行商に歩いたんです。23歳で結婚、25歳で家を建てました。銀行から借金をして、事業を起こしたかった。生きていくためには、どうしてもまず、帰化をしなければならなかったんですよ。帰化したとき、娘の良枝は9歳でした。良枝は帰化をした私に反発し続けました。けれども、良枝は歳を経てから、私が祖国を忘れたのではなく、日本で生きていくには、日本人にならざるを得なかったことを理解してくれました。38歳のときにここ大久保地区で旅館業を始めました。事業は順調で4件の旅館をもちました。済州島の方は、大久保地区にたくさん入ってきてホテル街をつくったのです。」

「すべての人が、堂々と本名を名乗り、国籍を語り、何のわだかまりもなく生きていける地域社会をつくろう」という李良枝の遺志を継いで妹さんが編集長となり、日・中・韓・英の4カ国の情報誌『We're』が創刊された。大久保地区を中心に毎回2万部を発行した。(川村、1998、pp.35-39)

創刊号の巻頭言には「文化の出会いは人との出会い。それぞれが共にあろうと努力してこそ、心からの友人と出会うことができる 李良枝」とある(We're, 92)。コリアン・ディアスポラが、祈りと希望を凝縮して情報誌に載せて、大久保地区の人々に発信した。

この情報誌の多額の資金的援助をしたのは、お父さんであった。筆者は李良枝の逝去後の一家の内発性と行動力に驚かされる思いだった。ディアスポラ家族のパワーは、極めてポジティブだった。この一家は世代間でディアスポラ接触を体験したのである。

妹さんは、コロンビア生まれのアメリカ人と結婚した。もう一人の妹さんは上海人と結婚、次々に子どもが誕生し、この家族には、日本語、スペイン語、中国語、ハングル、英語が飛び交っている。妹さんは、「大久保地区は本当にいろいろな国の人が住んでいて、一人ひとりがナニジンでもない。そんな環境から4ヶ国語の情報誌の発想が生まれた」と語る。

ディアスポラ体験は地域に何をもたらしたであろうか。1990年の初期には、大久保地区の親密圏にはこのような国民国家を超えるような意識改革とひたすらにそれを具現化しようとする営みがあった。ディアスポラ体験が地域の多文化意識の育成に影響を与え、アイデンティティの揺らぎや葛藤に気づきを与えたことは確かである。

韓国では飯屋と飲み屋と旅館は卑しい仕事とされていたが、在日コリアンは大久保地区に旅館業と焼肉店を開業し日本社会の冷遇に接しながらも苦勞を乗り越えた。90年代のニューカマーが増加するときの葛藤・軋轢の混乱期に、彼らがまちづくりに中心的役割を果たした。90年の改正入管法は、非正規就労の外国人だけでなく、彼らを雇用する事業主や斡旋したブローカーに対しても3年以下の懲役、または200万円以下の罰金という罰則規定が設けた。これにより歌舞伎町の風俗営業店などで働くことができなくなった女性たちが、大久保地区のホテル街に出没するよ

うになった。タイ、マレーシア、コロンビア、ブラジル、フィリピンなど多国籍な街娼が3メートルおきに昼夜立っていた。彼女たちからショバ代を取り立てるヤクザが自転車で回っていた。1990年に行われた一斉取締りと通常取り締まりをあわせると1年間に400人を超える街娼が逮捕された。しかし入管法改訂と大久保地区の社会現象の因果関係をどれだけの人が把握していただろうか。ラブホテルの存在がこのような事態を引き起こしたという意見もあった。いくつかの旅館は留学生会館に変貌している。たすき掛けの「環境浄化運動」には、人知れず在日コリアンも加わっていた。

日本政府は大久保地域の混乱を知りつつ、何の支援もなかった。しかし地域の医療機関からは外国籍住民に親切に対応する医師が出現している。外国人住民からは、大久保は治安が良くて安全だから住むという声が返ってくる。エスニック・レストランが1996年65軒、2003年には119軒、食材店（2003年19店）なども多く、母国の料理がいつでも味わえ、交流の輪も広がる。多言語の機関誌、情報誌（2003年7社）が急激に部数を伸ばし、分厚くなっていく。多様なエスニック・ビジネスの進展が地域にみられ、情報網が発達し、外国人居住者も街にすっかり馴染んで、相互に持ちつ持たれつの状況が生まれている。

11. ディアスポラの力

事例4：現在も真実を語れないコリアン・ディアスポラ

大久保地区には、普通の家屋が韓国家庭料理店になったと思われるレストランがある。在日二世の韓国家庭料理店では、経営者の娘が新宿のデパートに勤務していた（2000）。

「お母さん、焼肉屋なんてしないでよ。いつか職場の人がここに来たら、私が在日であることが、職場の人にばれてしまうかもしれない。」母親は、娘に韓国料理店を止めてほしいといわれてどうしようかと悩んでいた。娘にとってデパート勤務は彼女が自力で勝ち取ったアイデンティティであり、経済的自立の源であった。

一歩外に出れば、韓流ブームによってコリアンレストランはすでに100軒近くある。マスコミは大久保地区を「リトル・ソウル」「エスニック・タウン」「多国籍街区」「リトルアジア」などと括り、大久保地区のラベルを創出してきた。大久保地区は、90年代後半から観光スポットとなり、大型観光バスに乗った大勢の観光客が連日訪れるようになった。観光客は街の表層を「日本版多文化都市」として異文化の時空を消費する。そんな韓国性丸出しの地域空間で、これほど人権意識が浸透しているはずの時代に出自としての民族性を職場で隠して働かねばならない。

「思い切ってすべてを語ってみては」と助言することはたやすいが、そのことが、いつかリストラや結婚反対の理由になるリスクは否めない。娘を気遣う母親の複雑な心情、出自を隠して苦悩する娘の不安、それらの責任を、マイノリティの責任として押し付けてよいものなのだろう

か。戦後60年を過ぎてなお、在日三世、四世の時代にあつて「日本人」でもない、かといって片言のハングルも話せない状況のなかで、「コリアン」としてのアイデンティティがもてるわけがない。企業が国籍や出自による差別をしないことを宣言することには意味がある。このように大久保地区は、ディアスポラの接触領域（contact zone）であり、ディアスポラの真実を共生の内実と受け止め、ディアスポラの存在を可視化し、ディアスポラ接触を語り継ぐ街である。

12. ディアスポラ接触が語り継がれること

今日、在日コリアンは、日本社会から表面的には差別や抑圧などの対象になっていないとみなされているし、国籍取得についても簡易にとの運動がある。しかし実態は、この大久保地区のなかにさえ、祖国からもホスト社会からも切り離された疎外感と、抑圧された存在として生きているのである。それを日本人が認識していないことが多い。そのことは、今後の日本社会に新たに移住してくる外国人労働者や難民が、コリアン・ディアスポラの抱えている精神的疎外感と同じような疎外感をもろに受けることが想定できる。ディアスポラと呼称することが、そういった民族差別を回避するために有効性をもっている。さらに、オーバーステイの子どもや無国籍の子どもなど、法的に存在しない子どもがいることに気づきを与える。

コーエンは、ディアスポラを5つの類型に分けて分析した。被害者ディアスポラ、労働ディアスポラ、交易ディアスポラ、帝国ディアスポラ、文化ディアスポラ（コーエン、pp.12-13）である。ロッテ創業者の重光が、これらの重層的な形態をもって移動を繰り返したことを想起すれば、ディアスポラの類型における線引きは曖昧なものと言える。

しかしながら、ディアスポラ概念を導入することによって、まず、①日本社会にもコリアン・ディアスポラというディアスポラが存在すること認識することができる。次に②ユダヤ人ディアスポラから始まり、被害者ディアスポラとしてのアフリカ人・アルメニア人、帝国ディアスポラとしてのイギリス人、労働ディアスポラとしてのインド人、交易ディアスポラとしての中国人・レバノン人、文化ディアスポラとしての海外在住のカリブ人など「移住」「移動」を通して新しい視点から世界を展望できる。

大久保地区という小さな空間が、ディアスポラな空間であることを認識することは、世界のディアスポラを読む想像力を逞しくするのである。

ディアスポラは、生まれた場所、あるいは「ルーツ」としての起源の場所から切り離され、その場所との隔たりのなかにあつてなお、その起源との文化的、倫理的、宗教的結びつきを強くもった連帯のあり方、「ルート」（経路）を通した共同性のネットワークをつくりだしている（上野、1999：p.7）。このディアスポラ（離散）という言葉が語られ、語り継がれることによって、コミュニティはディアスポラがもっているパワーをまちの「由緒」として語り継ぐことになる。それは、単に研究者の分析に影響を与えるだけでなく、まちづくり、自治体や国の多文化共生政策、移民政策の実務者にも気づきを与えることになる⁽²⁰⁾。

ディアスポラは戦略的な概念として差別や抑圧に抵抗する力をもっているのである。

13. ディアスポラ博物館の力

ディアスポラの接触領域である大久保地区に市民の手によって「高麗博物館」が創設されたことは、ごく自然の成り行きだった。1990年高麗博物館を「つくる会」が誕生した。その年、日本政府が大韓民国に対して、過去の支配と抑圧について正式に謝罪を表明し、自由民主党、日本社会党、朝鮮労働党の三党共同宣言で、朝鮮民主主義人民共和国に対して、植民地支配とその後の敵視政策について謝罪と償いの意志を表わし国交正常化に向かって歩みだしていた。それを好機として「高麗博物館」運動が始まり、2001年12月職安通りに面した大久保一丁目に朝鮮半島や日朝交流の歴史を身近に知ることができる「高麗博物館」が誕生した。

有史以前から両民族は豊かな交流を保ち、日本にとって朝鮮文化は先駆的な役割を果たし、稲作や金属器文化、仏教等、貴重な文化の多くは朝鮮から伝えられたことが展示されている。近世の一時期と近代に、朝鮮を侵略し、植民地時代には土地や文化財、言葉と姓名を奪い、貧窮と「皇民化」を押しつけた。戦後は南北分断の固定化、在日コリアンに対する制度的、差別と排外を続けてきた。このディアスポラ博物館は、コリアン・ディアスポラとホスト社会との接触空間であり、ディアスポラ体験の場でもある。植民地時代に日本に運び込まれた朝鮮の文化財を展示し、美術館の役割も備えている。

筆者は、新宿区が建設し運営する新宿区歴史博物館でもディアスポラの歴史をテーマにした講演会の集いに参加することができた。その場に集う地元住民（＝ホスト社会）は、地域史が「多文化社会」を創造する基盤になることを肌を感じている⁽²¹⁾。

これらの博物館は、ディアスポラ接触の記憶喪失を防いでくれる。出産、恋愛、結婚、病気、葬儀、地震、火事などどんなライフイベントにおいても「ディアスポラ」概念が差別や偏見から生まれる抑圧や暴力を未然に防ぐ機能をもちうる。なぜならディアスポラの歴史は、誰もかき消すことができない人間のもう一つの真実の歴史だからである。

14. 結語

グローバル化の進展する中で多文化主義の重要性が見直されている。その側面としてネオ・リベラリズム（neo-liberalism、新自由主義）と呼ばれる政治・経済・社会体制の世界的拡大がある（塩原、2005：pp.9-10）。ネオ・リベラリズムとは、市場原理と自己責任を重視し、格差を是認する政治経済的潮流を意味し社会福祉政策の抑制後退、弱者の排除があちこちで見られるようになる。格差社会が加速する中で、経済合理性が重視され、よそ者である「外国人」への差別や排除はますます正当性を帯びていくだろう。

都庁が聳え立つ世界都市東京、その足元のインナーエリアで、職を失い希望を失った弱者が、どこかに身を寄せる「居場所」を探して彷徨っている。歌舞伎町を抜けて大久保地区の路地裏に

辿り着いたとき、そこには何らかの温もりがある。アイデンティティに苦悩した同性愛者や性同一性障害者、家族から見捨てられたホームレスの人々、超過滞在になった非正規滞在者、法的にも拠りどころのない無国籍の人々、不登校を繰り返し識字力のない人々、DVに傷つき、賃金未払いや人身売買の犠牲者など、大久保地区は無条件に誰でも受け入れてきた。筆者は、身ごもってはいけない子どもを身ごもってしまった無表情の女性や、売春行為に最後の望みを託した女性たちの風景を日常的な視界に納めてきた。彼女らを受け止める医者やシェルターがあり、そこには国籍による境界線がない。幾重にも受け皿があり、いつしか同じ地域の仲間として向き合っている。

大久保地区は、「ふるさと」を失った人々、社会から疎外される人々、見捨てられた人々、こういった傷ついた人々とも共生する多文化空間である。ディアスポラ接触とはそうした人々との共生を通して新しい生き方と人権の概念を生み出す可能性をもっている。一人ひとりの差異が表出し、外国人と日本人との境界線が消えていき、固定された純粋な文化などは存在しない。文化とはいかに曖昧なものであるか。多文化主義の可能性とは異種混雑性への「気づき愛」であり「思いやり」の可能性なのである。

日本人である筆者自身が、日本にいるディアスポラの気持ちをどれだけ汲み取れているかは、定かではない。しかし筆者にも1960年代の終わりから70年代初頭ロンドンで単身イギリスの会社に勤務し、「日本人」という重いアイデンティティを一身に背負って疲弊するディアスポラ体験があった。イギリス社会の最底辺で単純労働についていた移住者たちの姿も忘れられない。ディアスポラの記憶は、人の想像力を逞しくする。貧富の格差が広がれば広がるほど、「接触領域」(contact zone)は、双方に気づきを与え、コミュニティの破滅を防ぐ力をもっている。ネオ・リベラリズムの台頭する時代にあってディアスポラ接触は、地域コミュニティにだけでなく国家の政策においても重要な示唆を与えうる。文化とは曖昧なものであり、人の差異に照射すれば、国家が自明の理として引いてきた境界線や国籍の壁、純粋な血統に疑問を投げかけている。

本稿の結論として、大久保地区においてディアスポラ接触が語り継がれてきたことにより以下の4点をディアスポラ概念の特色として導き出すことができた。

- 1) 多文化世界では、日本人／外国人という二項対立的言説は不都合であり、はざまに生きる人びとを排除しがちである。
- 2) ディアスポラ接触は大久保地区の由緒となって語られ、ホスト社会の誇りであり、それぞれのアイデンティティに影響を与えている。
- 3) 地域が困難に直面したとき、それを克服する勇気をディアスポラ接触の歴史から学び受け継いでいる。
- 4) ディアスポラの経験のない人々は、ディアスポラ接触によって、彼らの経験や痛みへの想像力をもっている。それが「思いやり」となって街に活力を与えている。

この「思いやり」こそが、多文化意識の原点であり、大久保地区においてディアスポラ接触を可

視化することが「気づき愛」となり、その歴史的連続性は「由緒」となってコミュニティの基盤となっているといえよう。

付記：故李良枝氏のご家族には、ご了解をいただき、調査にご協力をいただいたことに感謝の気持ちを記しておきたい。

注：

- (1) ディアスポラ (diaspora) とは、ギリシャ語のディアスペイロ (dia-speir-o) が語源で、異なる方向に種を撒き散らすという意味であった。歴史的には離散状況に置かれてきたユダヤ人を指すことに使用され、近年は、広義に地球規模の人口移動の激しさから国境を超えて移動する多様な人々を指すようになっている。
- (2) イギリスの歴史家アーノルド・トインビーが、アテネで開かれたコミュニティ研究集会の折、都市社会学者・磯村英一に語った言葉だ。そのことを記した随想『「ふれあい」の原点「由緒」』は磯村の遺稿となった(1997年4月に逝去)。
- (3) 筆者の大久保地区における主な調査の経緯は以下の通りである。
1990年代 エスニックビジネス調査 (共住懇)、エスニックビジネスマップの作成。
 - ・ 大久保地区の社会学的調査 (日本科学協会の助成)
[エスニックレストラン、保育所、宗教施設、町会、市民団体：女性の家ヘルプ]
 - ・ 外国人と法 (多文化社会研究会、日本財団の助成)
[戸籍制度、出入国管理、子どもの権利]『多文化共生社会への道－外国人と法』刊行
 - ・ 異文化間教育学会 (文部省科学研究費)、学会誌『異文化間教育15』
 - ・ 放送大学・NHK 江淵教授の調査の案内 (大泉町と大久保地区)
[医療施設、大久保小学校、宗教施設、無認可保育所、区、保育園、町会、PTA、不動産など] 放送大学『共に生きる』2001～2004
 - ・ 多文化主義的経営調査：企業、デパート、華僑企業、在日起業家、旅館業、エスニックレストラン、東京都外国人会議、新宿区歴史博物館。2000年代 高麗博物館、新宿区歴史博物館、共住懇、韓国広場経営者、キリスト教教会、エスニックレストラン、エスニック・ビジネス、各種医療機関、介護施設、駅、商店、町会、自治体、教会、区長インタビュー、新宿区多文化共生プラザ。
- (4) 90年入管法改定の大波を受けた新宿区の体験を研究者は「多文化主義への陣痛」と捉えて『多民族共生の街・新宿の底力』と題して上梓した (川村編、1998)。
- (5) 出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- (6) 主なものに奥田道大「池袋調査」(1988～89)「新宿調査」(92年)「第二次池袋調査」(94年)、渡戸一郎「変貌する大都市インナーエリア」第1次大久保・百人町調査 2000、川村千鶴子・麦倉哲・「百人町・大久保地区」、NGO 共住懇、江淵一公・川村千鶴子「新宿調査 大久保小学校、ほか」放送大学、渡戸一郎、広田康生、田嶋淳子 (編) (2003)『都市的世界／コミュニティ／エスニシティーポストメトロポリス期の都市エスノグラフィー集成』明石書店、住民の意識調査として「新宿区における外国籍住民との共生に関する調査」(財)新宿文化・国際交流財団 2006がある。
- (7) 新宿区は居住の差別をなくすために91年「住宅及び住環境に関する基本条例」を全国に先がけて設定し、不動産業者を通じて「協力店制度」を発足させた。外国人顧客を専門にした不動産業者が出現した。社員には外国人を雇い、多言語の契約書や説明書などを完備し、「外国人歓迎」の看板が目につく。最近ではマンション組合も多言語で対応してトラブルを未然に防ぐ努力をしている。
- (8) 稲葉の調査によれば、大久保地区に点在する宗教施設 (教会、寺院、廟、モスクなど) が20箇所ある。占い師も3名いる (2007)。
- (9) 新宿区には多数の国際協力 NGO や市民団体が点在している。JICA の本部や多国籍企業と呼ばれる世界に進出した企業も新宿に多数拠点を置き、国際都市を形成した。日本ユニセフ協会、ACCU、OXFAM、日本財団、トヨタ財団、シャプラニール、開発教育協議会その他大小さまざまな民間協力団体や外国人支援団体：女性の家ヘルプ、アジア友好の家、共住懇などがある。

- (10) 日本語が不自由な外国籍の子どもや帰国子女のために1988年から教育センターに「フレンド教室」をスタートさせ、外国人児童の母語保持や帰国児童の言語能力保持の教室も機能した。2000年経費削減のために中止している。
- (11) 済州島四・三事件は、1948年4月3日に現在の大韓民国南部、済州島で起こった人民遊撃隊の武装蜂起にともなうとされる虐殺事件。南朝鮮労働党が関わっているとされ、政府軍・警察による粛清と鎮圧によって、多くの島民が虐殺された。またこの事件は麗水順天の抗争の背景にもなった。
- (12) 朝鮮戦争（1950年6月25日－1953年7月27日停戦、事実上終結）は、成立したばかりの大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の間で朝鮮半島の主権を巡って勃発した紛争から発展した国際戦争である。この戦争によって朝鮮全土が戦場となり荒廃し、朝鮮半島は南北二国による分断が確定されることになった。
- (13) ロッテは天然チクルガムの商品化に成功し、ロッテの企業イメージとブランド・ロイヤリティを高めた。重光はロッテを日本一の総合菓子メーカーに発展させ、非上場を貫き、所有と経営を分離させなかった。
- (14) 古典的儒教は商業を卑しむ風潮がある。例えば「孟母三遷」がある。孟子の母が商業行為を真似しようとした幼い孟子をみて教育上良くないと判断し引っ越したという故事である。商業蔑視の傾向は朱子学において顕著である。
- (15) 長男は日本ロッテの副社長、次男は韓国ロッテグループ副会長兼千葉ロッテ球団でオーナー代行をしている。
- (16) 盧泰愚韓国大統領の訪日を目前にした90年、日韓外相会談において、ついに指紋廃止が発表される。91年の海部首相訪韓時に調印された「日韓覚書」によって、2年以内の廃止が確定した。指紋押捺拒否者のもとには、おびたしい「脅迫状」が届いたり、いやがらせ電話がかかった。
「職務ゆえ許せとわれの手をとりて外人登録に指紋押さす 朴玉山」
（『朝日新聞』『朝日歌壇』、1997、12月18日）
このような光景がなくなるまでに、何と40年近くを要したのである（田中、1991）。
- (17) そのほかにもクーデンホーフ・カレルギー・光子（1874～1941）は、ハインリヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵にみそめられ伯爵夫人となった。新宿中村屋の娘と結婚したインド独立の志士・ラス・ビバリ・ボースの生涯も語り継がれている。
- (18) 70年代、新宿区大久保地区は、町名変更に伴う話題で盛り上がっていた。住居表示実施に伴い新宿区大久保・百人町の住民は、新宿区から町名変更の折、「新宿区中央新宿」を打診された。この打診は、住民に大久保地区が地図の上で新宿区の中央に位置していることを再認識させる。バブル経済の最中、都庁の移転も予定され、「新宿区中央新宿」の名称は、ビジネスの拠点として商業・経済の発展に相応しく、全国から垂涎の地名を獲得する絶好の機会であった。しかしながら、住民の中に反対意見が挙がり、元の地名が引き継がれた。
- (19) 山梨県立吉田高等学校から1973年に（昭和48年）京都府立鴨沂高等学校に編入。1980年には韓国を訪れ、以後往来を繰り返し、巫俗舞踊（ムソク）や伽耶琴（カヤグム）、語り歌（パンソリ）などの影響を受ける。1982年にはソウル大学校国語国文学科へ入学し、留学中に書き上げた「ナビ・タリョン（나비타령）」を『群像』に発表し、第88回芥川賞候補となる。
- (20) 自治体の調査（新宿文化・国際交流財団（2004）『平成15年度 新宿区における外国籍住民との共生に関する調査報告書』は、コミュニケーション、子育て、医療、近所づきあい、緊急時の対応、外国人犯罪、不法滞在者、偏見や差別の問題、ゴミ問題といった日常生活に終始している。在日コリアン、無国籍者、国際結婚の子どもの成長にも調査が望まれる。
- (21) 1998年、東京大学東洋文化研究所研究員であった趙軍氏は講演の中で、中国と日本の架け橋になった人物の歴史を説き、大久保地区が舞台となったと述べた。（新宿歴史博物館、1998）

<参考文献>

Appadurai, Arjun (1996) *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minnesota: University of Minnesota Press.

- Taylor, K. Charles, Anthony Appia, Jurgen Habermas, Steven C. Rockefeller, Michael Walzer, and Susan Wolf (1994) *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, New Jersey: Princeton University Press.
- Safran, William (1991) *Diaspora in Modern Societies: Myths of Homeland and Return*. *Diaspora* (Spring): pp.83-99.
- アパデュライ、アージュン、門田健一（訳）（2004）『さまよえる近代－グローバル化の文化研究－』東京：平凡社。（Arjun Appadurai (1996) *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minnesota: University of Minnesota Press.）
- アンダーソン、ベネディクト、白石鞘・白石隆訳（1997）『増補・想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行－』東京：NTT出版、（Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso Editions, 1983.）
- 李良枝（1997）『由熙』東京：講談社。
- 稲葉佳子（2006）「新宿区大久保における都市空間の変容と生成に関する研究」法政大学審査学位論文、東京：法政大学。
- 植田晃次・山下仁編（2007）『「共生」の内実－批判的社会言語学からの問いかけ－』東京：三元社。
- 上野俊哉（1999）『ディアスポラの思考』東京：筑摩書房。
- 江淵一公（2000）『文化人類学』東京：放送大学教育振興会。
- 江淵一公・酒井豊子・森谷正規（編）（2000）『共生の時代を生きる－転換期の人間と生活－』東京：放送大学教育振興会。
- 江淵一公（2001）「多文化共生型のまちづくりの変遷」『異文化間教育 No.15』異文化間教育学会、京都：アカデミア出版会。
- エリクソン、H. エリック（1981）近藤邦夫訳『玩具と理性』東京：みすず書房。（Erik H. Erikson, *Toys and Reasons*, Norton, 1997.）
- 奥田道大・田嶋淳子（編）（1993）『新宿のアジア系外国人－社会学的実態報告－』東京：めこん。
- カマーゴさか江（1993）『We're』No.19. Vol.3., 東京：ザ・サードアイコーポレーション、p.9.
- カプラン、カレン、村山淳彦（訳）（2003）『移動の時代－旅からディアスポラへ』東京：未来社、（Caren Kaplan, *Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*, North Carolina: Duke University Press, 1996.）
- 河 明生（2003）『マイノリティの起業家精神－在日韓人事例研究－』東京：ITA.
- 川村千鶴子（1982）「国際化する保育園の現状と多文化教育の必要性」藤原孝章（編）『外国人労働者問題と多文化教育－多民族共生時代の教育課題－』東京：明石書店。
- （1993）「新宿における国際理解教育の実践と住民の意識変化」『国際理解25号』大阪：国

際理解教育研究所.

川村千鶴子、タニード・ワジャラタナ、麦倉哲（1995）「新規来日外国人の生活拠点の形成と展開－新宿大久保・百人町地区の地域研究から－」『研究成果報告書』東京：日本科学協会.

川村千鶴子（1996 a）「多民族化する保育園の現状と多文化社会」『都市問題特集外国人の社会保障－ニューカマーを中心として－2月号』東京：（財）東京市政調査会.

——（1996 b）「在日トンガ人と比べた群馬県大泉町と東京新宿区の国際化」『国際人流』112号、東京：（財）入管協会.

——（1997）「新宿区－共生のマイナスをプラスに変えるまちづくり」『自治体の外国人政策－内なる国際化への取り組み－』東京：明石書店.

川村千鶴子（編）（1998）『多民族共生の街・新宿の底力』東京：明石書店.

——（2001）「異文化間介護の視座」『創造する対話力－多文化共生社会の航海術－』東京：税務経理協会.

川村千鶴子（編）（2002）『多文化教育を拓く－マルチカルチュラルな日本のなかで－』東京：明石書店.

川村千鶴子（2005）「多文化共生庁がなぜ必要なのか」『日本の移民政策を考える－人口減少社会の課題－』依光正哲（編）、東京：明石書店.

川村千鶴子（編）（2007）『異文化間介護と多文化共生－誰が介護を担うのか』東京：明石書店.

金友子（2007）「同胞」という磁場』『現代思想6』東京：青土社、p.211.

クリフォード、ジェイムズ、毛利義孝他（訳）（2002）『ルーツ－20世紀後期の旅と翻訳』東京：月曜社. (James Clifford, *Routes, Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, U.S.A.: Harvard University Press, 1997).

コーエン、ロビン（2001）駒井洋（監訳）『グローバル・ディアスポラ』東京：明石書店.

高鮮微（2003）「移動する人々と『故郷』－在日済州島人男性と事例に－」渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子（編）（2003）『都市的世界／コミュニティ／エスニシティーポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』東京：明石書店.

高麗博物館（編）（2002）『市民がつくる日本・コリア交流の歴史』東京：明石書店.

駒井洋（監修）、伊豫谷登士翁、杉原達（編）（1996）『日本社会と移民』東京：明石書店.

駒井洋（監修）、駒井洋（編）（1995）『定住化する外国人』東京：明石書店.

駒井洋（監修）、広田康生（編）（1996）『多文化主義と多文化教育』東京：明石書店.

駒井洋（監修）、渡戸一郎（編）（1996）『自治体政策の展開とNGO』東京：明石書店.

佐藤嘉尚（編）（2006）『新宿の一世紀 アーカイブス』東京：生活情報センター.

酒井直樹（1996）「序論：ナショナリズムと母（国）語の政治」（酒井直樹、ブレッド・ド・バリ、伊豫谷登士翁（編）『ナショナリティの脱構築』東京：柏書房、p.16.

塩原良和（2005）『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義－オーストラリアン・マルチカル

- チュラリズムの変容－』東京：三元社.
- 新宿区地域文化部文化国際課編（2007）『新宿文化絵図』東京：新宿区.
- 新宿文化・国際交流財団（2004）『平成15年度 新宿区における外国籍住民との共生に関する調査報告書』、東京：新宿区.
- 鈴木江理子、渡戸一郎（2002）『地域における多文化共生に関する基礎調査－日本における多文化主義の実現に向けて－』東京：フジタ未来経営研究所.
- 関根正美（2000）『多文化主義社会の到来』東京：朝日選書.
- 関根正美（1992）「エスニシティの社会学」（梶田孝道『国際社会学－国家を超える現象をどうとらえるか』名古屋：名古屋大学出版会、p.22.）
- 田中宏（1991）『在日外国人－法の壁、心の溝－』東京：岩波新書.
- 田中宏・江橋崇（編）（1997）『来日外国人入権白書』東京：明石書店.
- テイラー、チャールズ・佐々木毅・辻康夫・向井恭一（訳）（1996）『マルチカルチュラリズム』東京：岩波書店、pp.226－232.（Charles Taylor, K. Anthony Appia, Jurgen Habermas, Steven C. Rockefeller, Michael Walzer, and Susan Wolf, *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Princeton University Press, 1994.）
- 戴エイカ（1999）『多文化主義とディアスポラ』東京：明石書店、pp.49－51.
- 田嶋淳子（2005）「都市に埋め込まれるアジア」吉見俊哉・若林幹夫（編）『東京スタディーズ』東京：紀伊国屋書店.
- テッサ・モーリス＝スズキ（1996）「文化・多様性・デモクラシー－多文化主義と文化資本の概念にかかわる小考察」『思想867』東京：青土社、pp.43－44.
- テッサ・モーリス＝スズキ（2002）『批判的想像力のために－グローバル時代の日本－』東京：平凡社.
- ハージ、ガッサン、帆苅実・塩原良和（訳）（2003）『ホワイト・ネイション－ネオ・ナショナリズム批判』東京：平凡社.
- 早尾貴紀（2007）「「偽日本人」と「偽ユダヤ人」、そして「本来的国民」」『現代思想6』東京：青土社.
- 福岡安則（1993）『在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ』東京：中公新書.
- 前川恵司（1987）「『在日』の英雄・ロッテ重光武雄伝」『文芸春秋ノンフィクション』東京：文芸春秋社、p.103.
- まち居住研究会（稲葉佳子、塩路安紀子、松井晴子、小管寿美子）（1994）『外国人居住と変貌する街－まちづくりの新たな課題－』東京：学芸出版社.
- 宮島喬（2000）『外国籍住民と社会的・文化的受け入れ施策』文部省研究費補助金成果報告書.
- 麦倉哲（2006）『ホームレスの自立支援システムの研究』東京：第一書林.
- 山本薫子（2007）「ディアスポラの子どもたち－移民第二世代のジレンマとホスト社会のまなざ

- し』『現代思想6』東京：青土社.
- 山脇啓造（1994）『近代日本と外国人労働者－1890年代後半と1920年代前半における中国人・朝鮮人労働者問題－』東京：明石書店.
- （1995）「もう一つの開国－明治日本と外国人－」伊豫谷登士翁・杉原達編『日本社会と移民』東京：明石書店.
- 横田啓子（1995）『アメリカの多文化教育－共生を育む学校と地域－』東京：明石書店.
- 読売新聞社（編）〔2002〕『梅屋庄吉と孫文』東京：海鳥社.
- リャン、ソニア、中西恭子（訳）（2005）『コリアン・ディアスポラ－在日朝鮮人とアイデンティティー』東京：明石書店.
- 李朋彦（2005）『在日一世』東京：リトルモア.
- 渡戸一郎（2001）『新宿調査2000－変貌する大都市インナーエリア－第2次外国人急増期の大久保・百人町を中心として』東京：渡戸研究室.

（2007年9月29日受理）